簾雜載

〔雍州府志七土産〕翠簾　禁裏院中之翠簾、谷口和泉守製之、公方家之所用者、望月某造之、其餘簾箔、大佛邊伏見町造之、茶亭窓間所掲之伊豫國産細竹簾、別有其家、

〔守貞漫稿五生業〕簾賣　初夏以來、三都トモニ竹簾葭簀等ヲ賣ル、其扮定ナシ、

〔枕草子三〕ゑきの御さうじの西をもての、略中女は、ねおきたるかほなんいとよきといへば、ある人のつぼねにゆきてかいばみして、又もし見えやするとて、きたりつるなり、まだうへのおはし、つる折からあるをえゑらざりけるよとて、それよりのちは、つぼねのすだれうちかづきなどし給ふめり、

〔枕草子六〕正月に寺にこもりたるは、略中小法師ばらの、もたぐべくもあらぬ屏風などのたかき、いとよくゑんたいし、たゝみなどほうどたてをくと見れば、たゞつぼねに出て、犬ふせぎにすだれをさら〳〵とかくるさまなどぞいみじく、ゑつけたるはやすげなり、

〔枕草子十一〕雪いとたかく降たるを、れいならず御格子まいらせて、すびつに火おこして、もの語などしてあつまりさぶらふに、少納言よ、かうろほうの雪はいかならんと、仰られければ、みかうしあげさせて、みす高くまきあげたれば、わらはせ給ふ、人々も皆さる事はゑり、歌などにさへうたへど、思ひこそよらざりつれ、猶此宮の人には、さるべきなめりといふ、

〔十訓抄一〕同院條院〇一雪いと面白く降たりける朝、端近く出居させ給て、雪御らんじけるに、香爐峯のありさまいかならんと被仰ければ、清少納言御前に候けるが、申事はなくてみすををしあげたりける、世の末まで優なる例に云傳られける、彼香爐峯の事は、白樂天老の後、此山のふもとに一の草堂をしめて住ける時の詩に云、

遺愛寺鐘欹枕聽　香爐峯雪撥簾看

とあるを帝仰出されけるによりて、御簾をばあげけるなり、彼清少納言は、天暦の御時、梨壺の五